

PL

外國に於ける國字問題

文  
部  
省



外國に於ける國字問題

文  
部  
省



## 凡例

一 本書は、近時外國で起つた國字統一或は國字改定に關する運動を、各種の材料によつて略敘したものであつて、我が國字問題の參考の資としようとするものである。

一 本書は、國語調査主任保科孝一、國語調査囑託安藤正次の調査したものである。

大正八年七月

文部省普通學務局

# 外國に於ける國字問題

## 目次

第一章 緒言	一頁
第二章 獨逸に於ける國字問題	五
第一節 獨逸に於ける國字問題の由來	五
第二節 獨逸の屈折文字の歴史	九
第三節 讀む文字としての獨逸文字	二四
第四節 印刷文字としての獨逸文字	二六
第五節 手書文字としての獨逸文字	三〇
第六節 獨逸語を再現する文字としての獨逸文字	三二
第七節 教育上及び衛生上より見たる獨逸文字	三六
第八節 世界文字としての獨逸文字	三八

第九節 獨逸主義と獨逸文字	四〇
第三章 露西亞に於ける國字問題	四九
第四章 アルバニアに於ける國字問題	五五

# 外國に於ける國字問題

## 第一章 緒言

文字の借

文字の改  
善問題

國字改善  
問題

文明の或程度に達した民族が、文字を有してゐない場合に、他の民族の用ゐて居る文字を採用して、之をその國字となすといふことは、文字史上に多くの類例を見ることである。それ等の場合に於て、各民族は、その借り來つた文字を、その國語、その習慣に適應するやうに、字體、書法、音價、意義を變改するのが普通になつてゐる。假令、その文字が、外から借り來つたもので無く、自發のものであるとしても、時代により必要に應じて、種々の點に於て改善を加へるといふやうなことも、文字史上にその例を見ることが出来る。近代の國家に於ても、同様な事情の下に、現に用ゐられてゐる文字に對して不便や不満足を感じる場合に、その改善の必要を認め、或は從來用ゐてゐた文字に改訂を加へ、或は他國の文字を輸入して之に幾分の修正を加へ、之を在來の國字に代へ、或は新字を創製して之を國字としようといふやうな議論の生ずる事があり、また、種々の文字の併用せられてゐる場合に、その孰れかに一定しようといふ議論が生ずる。我が國に於ても、從來、國字改善の問題については、諸種の説が世に出てゐるが、これは、國民文化の上に

重大な關係を有するものであつて、輕々に決定されうべき事柄でも無く、また、單に純理の上からのみ論せらるべき性質のものでも無い。人文の發達が、まだ高い程度に達しない時代の國家、漸く文化の曙光を認め得るくらゐの民族の間に於ては、文字などの改廢も、比較的容易であるが、既に國家を成せること日久しく、文化の根柢も既に十分に出來上つてゐる民族にあつては、かういふ事は、餘程六かしいことに屬する。此等の點を考へると、吾人は、近代の國家に於て、國字問題がどういふ風に取扱はれてゐるか、どういふ風に處理されたかといふやうなことを見る必要がある。今、本編に於て、外國に於ける國字問題の經過を概説するのは、即ち、その參考の資に供せんとする爲である。

外國に於て、國字問題の最も盛に論議されてゐるのは獨逸である。獨逸では、獨逸文字と羅典文字とが相竝んで行はれてゐるので、獨逸文字專用説と羅典文字專用説とがあつて、雙方の論者が相執つて下らず、これが學界及び社會の一問題となつてゐる。大戰中でも、この議論は影を潜めず、敵愾心發揮の結果、羅典文字を排斥して獨逸文字のみを用ゐようといふ議論の方が、勢力を得てゐるやうである。

近代の國家に於て、國字改善の舉が、最もよく徹底的の効果を收めたのは、彼得大帝時代の露西亞である。露西亞では、最近には、國字を羅馬字に改めようといふ議論も出てゐるやうである

が、その以前の國字の不便を改めた彼得大帝の遺業は、今日に至るまで、永く露西亞國民にその恵を垂れたといふことが出来る。

アルバニアに於ても、國字問題は、重要なものとなつてゐるが、これは、單に國字の便不便のみの問題で無く、民族的政治的關係が紛糾してゐて、他の國の國字問題とは、餘程趣を異にしてゐる。

以上の諸國に於ける國字問題の經過は、本編にその大要を記述することとしたが、此等以外にも、國字改善の行はれた國家が無いのでは無い。例へば、セルビアの如きは、十九世紀の中葉に於て、國字改善の運動があつた。現今のセルビアの文字は、キリル文字の系統を引いたものであつて、露西亞文字に改訂を加へたものである。これは、主として、スラヴ語學の大家ダニチツチの力によつたので、一千八百四十年に出た、その著「セルビア語及びセルビア文字」は、この問題に解決を與へたものといはれる。

支那では、近時、一種の音標文字、注音字母といふものが制定された。これは、純粹の國字といふべきものではないが、文字に關する一種の運動として、注意すべきものである。元來、注音字母といふのは、外人が、官話を學習するに、羅馬字母(即ち羅典文字)を用ゐて音標となすに倣つて支那の人々が、自己の國音を寫す目的を以て製作した音標文字のことである。

支那の學者が、かういふ注音字母といふもの、即ち支那語の音韻を寫し出す音標文字に注意するに至つたのは、最近三四十年來のことである。而して、既に、此に關して自己の案出した字母を發表したものが數十家ある。その中で、最も著名なものとしては、北方に王照（小航）の京音字母があり、南方に勞乃宣（玉初）の簡字がある。然るに、この三四十年來、音韻専門家の注音字母に苦心する者は、大抵、その平日の研究に本づき、各その居る所の地方について創作するのであるから、これによつて、見解同じからず、爭論がやまない。それで、民國二年の春、支那政府の教育部は、讀音統一會といふものを組織し、各省から代表二三名を出させて、音標を議定し、字を按じ音を審かにし、その決議の結果を發表してゐる。讀音統一會の發表した注音字母は二十九、その審定した字音は八千餘字の音にわたつてゐる。注音字母の特色として見るべきは、その字形は古文より假借し來つて、之を字母的に用ゐるといふ點にある。支那のやうな、方言の分裂の甚しい國、南北の語音相通じないやうな國にあつては、かういふ性質の文字は、その自然の必要に應じて案出されるに至つたものといふことが出来る。

## 第二章 獨逸に於ける國字問題

### 第一節 獨逸に於ける國字問題の由來

獨逸に於ける國字問題の由來は久しい。獨逸には、今日、普通に獨逸文字といはれ、我國で、俗に龜の甲文字と名つけてゐる アルツフ・シエリフト 屈折文字と、普通に羅馬字と呼ばれる羅典文字との兩者が行はれてゐるが、獨逸文字史の上では、屈折文字が原住者であり、羅典文字が移住者たる關係になつてゐる。

此の羅典文字が、日耳曼民族殊に獨逸に入り込み來つたには、随分古い歴史がある。近時に至るまで、略三回の曲折を経てゐる。

第一期は、民族遷移の時代である。日耳曼民族が、基督教を輸入した時に、それまで用ゐられてゐたルーナ文字は、從來の宗教と共に驅逐されたが、此の時に當つて、基督教の宣教師等が、日耳曼民族に教へ込んだのはローマ文字であつた。此より以前、一方には、三五〇年頃に出來たウルフィラ文字といふものがあつたが、此は、日耳曼民族中のゴート人に、主として用ゐられたものであつて、ゴート以外の日耳曼人、殊に、獨逸人は、猶、ルーナ文字を用ゐてゐたのである。それが、基督教を受け入れて後、一般に行はれるローマ文字を用ゐるやうになつた。然るに、そ

の後、民族遷移の大動亂の稍、靜まるに及んで、此のローマ文字を斥けて、一種の別の文字を作り出すやうになつた。これが、今の獨逸文字の祖であるといはれる。(尤も、此の文字が、ローマ文字の變形であるか、或は、ルーナ文字の發達したものであるかは、學者の議論の紛糾する所である。此については、更に、後章で解説する。)

第二期は、第十五世紀、第十六世紀の頃で、此の時代の歐羅巴の人文主義者は、羅馬人崇拜の結果、カロリングル時代にも一部分は用ゐられてゐたローマ文字の小字體の草書を準據として、新ローマ文字を作り出した。此の新ローマ文字は、或は、ローマンス文字、或は、ウエルス文字、或は、羅典文字といはれる。獨逸に於ても、此の時代に、人文主義の影響を受けて、獨逸文字を斥け、此の文字を用ゐようといふ運動が行はれた。

第三期は、第十九世紀に於ける新人文主義派の人々、ヤコブ・グリムやリヒャルト・ワグネル等が羅典文字を用ゐようとい主張した時代である。

此のヤコブ・グリム時代以前の、即ち、第一期、第二期の羅典文字輸入は、文字の性質とか、文字の適應とかいふやうな議論や研究の下にあらはれた企圖によつたものでは無い、第一期のものは、當時に於ける一般社會の民族が、多くは無學であつて、文字は、基督教僧侶の階級から出たのであるから、自ら、ローマ文字が輸入されたに過ぎない。第二期のものは、當時に於ける希臘

羅馬文明の崇拜熱にうかされた結果である。我が國に於て、支那崇拜の時代に、漢字でなければ文字で無いやうに考へたのと同じであつて、ローマ文字は、羅馬文明の産物であるからよいといふやうな考からであつた。然るに、第三期に於ては、此の時代の新人文主義が、前の人文主義の系統を引いてゐるやうに、羅典文字に對する一般人の感情も、やはり、希、羅文明の影響をうけてゐたには相違ないが、學者の主張する所には、眞に對する憧憬と、物に關する洞察と、自己に立する熱烈とがあつた。例へば、ヤコブ・グリムが、獨逸文字即ち屈折文字を排して、羅典文字を用ゐようといふ議論の根據は、屈折文字は、獨逸本來のもので無いといふのにある。グリムは、

中世紀に於ては、全歐洲を通じて、只一つの文字、即ち、羅典文字が、すべての國に於て用ゐられ、すべての國語をあらはしてゐた。然るに、第十三世紀以來、文字を筆寫するものが、從來の文字の圓形を尖らせたり、角ばらせたりして、形を變へ、頭文字に花彩を施したりする事をはじめた。印刷術の發明者は、其の字型を鑄造するに當つて、此の手書の字形を選定して模本としたから、第十五世紀の印刷文字は、羅典文字でも、獨逸文字でも、佛蘭西文字でも無いわけである。

といつて、歴史的説明を加へ、此の印刷文字の後裔たる獨逸文字は、排斥しても差支無いものである。獨逸文字、羅典文字の二種を用ゐるは、二重の負擔であるから、中世以來、歐洲一般に

用ゐ來つてゐる羅典文字一種にしてしまふ方がよいと主張してゐる。此の歴史的説明が當を得てゐるかどうかは別問題であるが、グリムが、其の意見を、單に、感情の上のみにのみで無く、學術的根據の上に主張したことは、之によつて明らかである。國字の議論に、國字の歴史の研究が相伴ふやうになつたのは、この時代からである。年處を経るにしたがつて、これに、種々の分子が加はつて、問題が錯綜し、左の如き諸種の方面から議論されることとなつた。

諸種の問  
題

- (1) 讀む文字として見たる獨逸文字
- (2) 印刷文字として見たる獨逸文字
- (3) 手書文字として見たる獨逸文字
- (4) 獨逸語を再現する文字として見たる獨逸文字
- (5) 教育上並びに衛生上より見たる獨逸文字
- (6) 世界文字として見たる獨逸文字
- (7) 獨逸主義より見たる獨逸文字

## 國字論戰

以上の各方面から、獨逸文字、羅典文字の優劣が比較せられて、所謂國字論戰シュリットカンプの開かれてゐるのが、最近の狀況である。羅典文字論者の團體としては、ウィースバーデンのフリッケ(Fricke)の創立した羅典文字協會(Lateinische Schriftverein)あり、雜誌としてはレフォルム(Reform)

あり、獨逸文字論者の團體としては、一八九〇年アドルフ・ライネッケ (Adolf Reinecke) の創立した一般獨逸文字協會 (Allgemeine Deutsche Schriftverein) あり、雜誌としては、その會報がある。

此の論争は、帝國議會の問題にもなつて、一九一一年の帝國議會では、四分の三の多數で、一般獨逸文字協會の請願を採擇してゐる。

## 第二節 獨逸の屈折文字の歴史

獨逸の屈折文字が、羅典文字から出たか、獨逸民族固有の文字からの發達であるかは、議論の岐れる所である。獨逸文字論者は、獨逸文字は、やはり、獨逸民族の自發的製作であるといひ、羅典文字論者は、獨逸文字は、やはり、羅典文字から發達し來つたものであるといひ、各々、其の議論を主張して、之を自説の根據としてゐる。

從來の文字學者は、多く、獨逸の屈折文字は羅典文字より出たといふ説を唱へてゐる。今、その代表として、テイロアの説の概要を左に挙げる。(Taylor: Alphabet 第二卷一六三頁以下)

「羅馬帝國が滅びて後、各國に、國民的の文字といふべきものが發達した。ゴールに於けるメロヴイングル文字 (Merovingian) 伊太利に於けるロムバルド文字 (Lombardic)、西班牙に於けるヴィシ

ゴート文字 (Visigothic) の如く、これである。然し、此等は、いづれも、羅馬の文字の草體の系統に屬してゐるものであるが、愛蘭文字は、他の者と異なつた事情がある。愛蘭文字は、紀元後六世紀頃からのものがあるが、文字の、規則正しい事と圓形である事とは、羅馬のアンシアル文字 (Unials) に似てはゐるが、多くの文字の構造は、實際異なつてゐる。通常、之を、アイリッシ・アンシアル (Irish Unial) 或は、セミ・アンシアル (Semi-Unial) と呼んでゐるが、眞のアンシアルとの關係は明らかで無い。

「愛蘭文字の歴史はわからないが、第六世紀頃に、此の文字は、突然出現してゐる。それで、此は、ゴールから、第五世紀の頃に輸入されたものであらうといはれるが、此が、通常のアンシアルから出たとは考へられない。此は、全く、起源の異なつた二つのものが、アンシアルといふ共通の名で混同されたものであらう。羅馬のアンシアルは、主として、大字から進化したもので、所謂愛蘭アンシアルは、佛蘭西南部の地方で、地方的に、第五世紀頃に用ゐられてゐた草體文字 (Cursive) から進化して、二三の、他のアンシアル字形を交へたものであらう。南方のゴールの草體文字は、この意味に於て、愛蘭の字形の原型である、羅馬のアンシアルは、大字を圓くしたものの、愛蘭のアンシアルは、羅馬の草體文字をアンシアル化したものである。前者は、形の頽れた結果であり、後者は、改良の結果である。

アングロ  
サクソン  
文字

八世紀か  
ら九世紀  
に於ける  
改善の  
文字の  
カロリン  
小字體の  
發達

「アングロサクソン民族は、その文字を、一部分は、羅馬の宣教師から、一部分は、愛蘭人から受けた。されば、アングロサクソン文字には、羅馬と愛蘭との二大書道が流れ込んでゐる。それで、アングロサクソン文字は、南方型、北方型の二つに分けて見られる。この北方の字型は、カロリン小字體(Caroline Minuscule)に對して系統的の關係を有つてゐるといふ點で重要である。

「紀元八世紀から九世紀にかけて、歐羅巴では、東西に、文字の改善が起つた。東方に於ては、第九世紀に、羅馬のアンシアルや草體カーシエの文字が亡びて、新しい小字體ミヌスケール、即ち、後に、書籍體ブックハンドとなつたものが出來たが、西方に於ても、シャーレマンの朝に於ける帝師アルクイン一派の手によつて、新字體が出來た。此の新文字は、主として、第八世紀の、圓い英吉利の書籍體から得たのであるが、又、ロムバルドの小字體や、羅馬のアンシアルより得た成分をも取り入れ、出來得べくば、メロヴィングルの草體をも採つた。

「此の文字が、速かに書けるとか、讀みやすいとか、場所をとらないとかいふ、種々の卓越した點がある爲に、速かに、一般に用ゐられるやうになり、又、アルクインの徒弟が、歐洲に擴まつたが爲に、従前の文字は斥けられて、此の文字が、之に代つた。此の文字は、通常、カロリン小字體ミヌスケールとよばれる。

「第十一世紀の終、第十二世紀の初頃が、此の文字の全盛期であつた。第十二世紀の終頃になつ

ゴート文  
字

伊太利に  
於ける印  
刷文字

活字の發  
明者はゴ  
ート文字  
を模型と  
す

佛蘭西

ては、やや、字體が頽れて來て、字形も、充分注意されず、インキの質もわるくなり、字も太く  
なつた。第十三世紀になつては、文字は、一層角張つて來た。かくて、第十四世紀に至つては、  
ブラツクレター  
黒字體、或は、ゴート文字 (Blackletter, Gothic) とよばれる字體となつたのである。

「然るに、第十五世紀に於て、學藝の復興を見、趣味が向上すると共に、此の文字は粗野であ  
るといふので嫌はれて、伊太利の學者に捨てられた。伊太利の學者達は、また、以前の、第十一  
世紀の美しい小字體を用ゐるやうになつた。併し、此の改革は、獨逸には及んでゐなかつたから、  
第十五世紀の中葉に、活字印刷の術が、マインツのグーテンベルクによつて發明された時に、獨  
逸人たる發明者が、當時、其の地方に行はれてゐたデラックレター黒字即ちゴート文字を模型としたのは怪  
しむに足りない。

「此の印刷術は、アルプスを越えて、南の方伊太利に入つたが、此を傳へたスーピアコ (Sulhaco)  
の僧侶たちは、黒字を捨てて、當時の伊太利の社會の要求にしたがひて、當時行はれてゐた、古  
い美しい小字を模型とするやうになつた。一四六五年に出來た印刷物を見るに、よほど、今日の  
ローマ字の形に近づいてゐる。一四七〇年に此等の字型が巴里に輸入され、ソルボンで採用され  
た。此が、佛蘭西で印刷された最初である。ローマタイプとか、ローマ字とかいふ名は、此の  
字形が最初に、羅馬で用ゐられたからである。

「此のローマ字が倫敦で用ゐられるやうになつたのは、此が、佛蘭西に輸入された後約五十年を経てからである。これまでの英吉利の書籍は、黒字體で印刷されたのであつたが、此の時より、黒字體は、漸く斥けられるやうになつた。」

以上が、テイロアの所説の摘要であるが、ヘルマン・コーン(Hermann Cohn)は、また、「書籍や新聞は如何に印刷されるべきか」(Wie sollen Bücher und Zeitungen gedruckt werden? 1903)といふ書中に、次の如くいつてゐる。

獨逸人のうちには、愛國主義から、獨逸文字を維持しようとしてゐる人がある。彼等は、獨逸文字は、日耳曼人の特質をあらはすものであつて、獨逸人によつて正當と認められたものであるといふやうに考へてゐる。ビスマルクも、また、此の誤謬に因はれた人であつて、彼は、屢々、羅典文字で印刷した書は見たくないと公言し、また、其の署名には、獨逸文字を用ゐてゐた。

然し、吾人が獨逸文字といつてゐる文字は、毫も、日耳曼人や、ゴート人に關係してゐるものではない。ヤコブ・グリュムのいつて居る如く、此は、ベーメン文字とも名づけられるべきもので、歴史的にいへば、羅典の僧院文字に裝飾のついたのに外ならない。

獨逸では、昔は、すべて、羅典文字を用ゐてゐたが、中世になつて、僧侶が、昔の羅典文字に、ゴートの建築様式に似た、頭部や脚部の飾をつけることをはじめた。ゴート文字といふ名

は、これから出た名であつて、ゴート民族とは關係が無い。而して、此の文字は、上下に屈折があるから、或は、之を屈折文字 (Fraktur, *gelochene Schrift*) と呼ぶ。此の文字は、印刷術發明後、間も無く、獨逸語のみならず、羅典語や、佛蘭西語や、英吉利語の書籍の印刷にも用ゐられ、僧侶は、之を、獨逸以外に、佛、英、伊、西などにも擴めたが、此等の諸國では、第十六世紀に於て、幸にも、之を捨て、もとの羅典文字に改めてしまつた。然るに、獨逸では、猶、之を、今日までも固守し、之を、國民的のものだと思つてゐるのである。

獨逸文字論者の方では、歴史的に、獨逸文字が、日耳曼民族の手から出たものであるといふことを證明しようとしてゐる、これは、一方からいへば、すべてを、國民的に統一してゆかうといふ獨逸氣質の然らしむる所である。今、此の代表者として、リヒテンベルグのラインホルト教授を擧げることが出来る。同教授の説は、一般獨逸文字協會の會報のうちに見えてゐるが、その大意を次に紹介する。

氏の説によると、獨逸文字は、ルーナ文字 (Rune) から、その系統を引いてゐるといふのであるから、その説は、勢、ルーナ文字の起源からはじまる。

西班牙の墳墓や、葡萄牙のドルメンの多くから、直線の記號のついた石が出る。これは、文字と思はれるものであるが、其の發見の場所によつて時代を考へれば、まさに、後期の石器時

代から、前期の青銅時代、更にまた、鐵器時代にも及ぶものである。このうちで葡萄牙のアルヴァニョのドルメンから出るものが最も古い。

また、佛蘭西のマス・ダツイルの洞窟に於て、或は、その他の地方で、馴鹿の角に、古い記號のついたものが發見されてゐる。此等は後期の石器時代から、前期の石器時代に遡るものである。

右の兩者は、よく一致してゐるが、此が、歐羅巴アリアンの文化の一中心をなしてゐる。之に對して、驚くべき類似をもつてゐる日耳曼のルーナ文字が、第二の文化の中心をなしてゐる。

エグイアの文字は、以上の二中心に對して、第三の中心をなしてゐるものと見られる。クレタから出た刻文は、エヴァンス其の他の學者もまだ讀み得ないものであるが、之によく似たものに、キプロス島のものがある。此は、殆んど三世紀間の努力で解説されたが、此には、注意すべき事實がある。其は、此のキプロス文字は、他の二者とは異なつて、字母文字で無く、音節文字であるといふ事である。

今、此等の文字表を比較して見ると、三者の地理上の距離は、頗るはなれてゐるけれども、字形に於ても、音價に於ても合致してゐる。字形や、音價が合致してゐるとすれば、すべての

ルーナ  
文字

エグイ  
ア文字

キプロ  
ス文字

三種の文字の種類は、共通の起源を有してゐると見られる。而して、何處が最古であるか、その根源はどこにあるか、その傳播狀況は如何といふことが研究すべき問題である。

從來歐羅巴の文字は、フェニキア文字の發達したものであるといふのが定説となつてゐたが、上述の歐羅巴最古の遺文が、確かにフェニキアの遺文と認めるべきものの、未だ無い時代、かなり新しい人種の混合によつて出來たフェニキア人といふ民族が、未だ出來なかつた時代、故に、フェニキア文字などといふものが未だ無かつた時代のものであるとすれば、歐羅巴文字のフェニキア起源説は成立たないわけである。

歐羅巴に於ける文字の遺文は、歐羅巴の人が、氷河に追はれて、佛蘭西の方へ、更に遠く西班牙の方へ退いたやうな古い時代から存じてゐる。氷河後に於て、此等の歐羅巴人は、漸次北上して、終には、歐羅巴全部に、新石器時代の文化を擴めたが、土地によつて先後あり、發達に相違がある。而して、ここに民族的相違を生じ、三つの特殊の文化ケルノーレックライス圏が出來た。第一は、北に於けるメガリト文化(Megalith-Kultur)の地方第二は、南及び東の地方、第三は、前の兩者の間に位し、北の方バルカン及び下部ドナウ、即ち、今日の墺地利から中部獨逸まで、猶、西の方ラインにまで及んでゐる地方である。

此の、南の地方と北の地方との間には、その文化の上に於て、共通の分子もあるし、また、

兩者の間に截然たる相違の點もある。文字の上でもまたさうであつて、其の記號の形に於て、相互に類似の點の認められるべきものがあるが、また、文字の性質を見ると、北に於ては、純然たる字母文字のルーナ文字が發達し、南に於ては、エグイアの文化に發達したキプロス文字のやうな音節文字が出來た。このキプロス文字が音節文字であるのは、アリアン人が、西方から來て、エグイア海に植民した當時、アリアン民族以外の原住民が有してゐた、一種の象形文字から發達した音節文字の影響をうけたのである。これが、希臘では、後に、立派な字母文字として發達したが、キプロスに於てだけは、有史時代まで、音節文字のまま傳はつた。

此のキプロス文字の、今日に傳はつてゐるものを見るに、北方のルーナ文字と認められるものがある。然るに、キプロス文字の古いものは、紀元前千年時代のものがあるが、ルーナ文字の刻文は紀元後のものが傳はつてゐるに過ぎない。此に於て、兩文字新古の論が出來るが、單に、傳來の新古を以て、文字そのものの歴史の新古を論ずることは出來ない。ルーナ文字の古い刻文の傳はつてゐないのは、日耳曼民族が、此の文字を、單に、神聖の用にのみ用ゐて、俗用につかはなかつた故である。

歐羅巴のアリアン人の文字は、前に述べたやうに、共通の起源を有するものであるが、これが、亞細亞の民族や、セム民族の間にも擴まつて行つた。フェニキア文字が、歐洲文字の起源

であるといふ説があるが、それは誤である。

ルーナ文字は、傳説によれば、最高の智慧の神たるウォータン (Wotan) の創始したものといはれ、北方に發達したものであるが、北方のアリアン人が、南の方伊太利半島に植民した時に此の文字も共に伊太利に入り、この文字から、羅馬の碑銘體 (Lapidar-schrift) が出來た。

されば、ルーナ文字は、アリアンの原始の文字である。最古の時代に於て、アリアン人の原住地で出來たものであるから、此の原住地に住み残つたアリアン人は、その原始の姿を、最もよく保存してゐた事はいふまでも無い。而して、此のアリアン人は、即ち、日耳曼人である。

羅馬人の日耳曼侵入後、及び、所謂民族遷移の後、此の日耳曼人は、また、他の民族と活潑に交通をなすに至つた。此の故に、紀元後第五世紀、第六世紀以來、中歐及び伊太利に於て、はやく書ける文字の必要を生じたが、ルーナの古い形はもとより、羅典の大字も、此の目的の爲には不相應である。此を書きよくする爲に、大小字の所謂行書 (Kurschrift) を發明した。

此の行書は、羅典の大字をもととしたのもあり、ルーナ文字をもととしたのもあるが、此は、地方的の相違であつて、要するに、南の方のは丸く、北の方のは、字形が尖つたり裂けたりしてゐる。此の北の方のが屈折文字である。この屈折文字を、日耳曼起源で無いといふのは誤謬である。

ルーナ文字はアリアンの原始の文字

屈折文字は日耳曼起源

又、屈折文字は、僧院文字であつて、羅馬の僧侶から、移入された文字であるから、日耳曼民族の民族的氣質の作り出したものでないといつて非難する人があるが、これは、メロヴィンデル時代、カロリングル時代頃には、僧門の人々が、獨逸の名門出の人々であつたことを考へないからである。屈折文字は、此等の僧侶の弘めたものであり、やはり、全く日耳曼風のものである。

又、此の屈折文字の字體の裝飾は、古日耳曼の編物細工や、鞣革の裝飾に關係がある。而して、これは、ケルト風のものだといふ説がある。然し、ケルト人も、スラブ人も、他の非アリアンの血液の混じらない限は、日耳曼人と同じである。言語及び體質に於て同様であるから、ケルト風と日耳曼風と、兩者の裝飾趣味が同じであるのも怪しむに足りない。

又屈折文字の行はれた範圍と、ゴート文字の行はれた範圍とから見て、此の兩者は非日耳曼文字だといふ論があるが、それは、人種や民族の觀察をなさずに、輕々しく論を立てたものである。即ち、此等は、いづれも、日耳曼人の、植民地に於ける勢力の表現であり、日耳曼風と見るべきものである。

右の所説は、強ひて、獨逸文字を、日耳曼民族にひきつけようとする嫌があるが、此は、羅典文字論者が、羅典文字は、いふまでも無く他の民族の文字であるが、獨逸文字も、やはりさうで

アドルフ  
・ライネ  
ツケの所  
説

日耳曼民  
族の文字

羅馬文字  
の改作

メロヴ  
ンゲル文  
字

ある、同じく他民族の文字ならば、その便利なるもの、比較的優秀なるものを採用すべきであると主張するに對して、國粹主義から、獨逸文字の維持を力説しようとする爲の議論である。アドルフ・ライネツケ(Adolf Reinecke)も其の著「獨逸文字」(Die deutsche Buchstabenschrift 1910)の中に、同じ事を論じてゐるが、その大要を摘出すると、次の如くである。

日耳曼民族の古代には、ルーナ文字があつたが、此は、民族遷移の時代に、基督教の輸入と共に驅逐された。ゴート族の間には、ウルフイラ文字が行はれたが、ゴート族以外の日耳曼民族の間には、基督教と共に輸入された羅馬文字が用ゐられた。然し、民族遷移の大動亂の稍靜まるに及んで、彼等は、漸く、此の文字を厭ふやうになり、日耳曼民族の趣味に適ふやうに、羅馬の文字を改作するに至つた。これには、ルーナ文字の影響もあることは否定し難い。

第六世紀頃のフランク國のメロヴインゲル王朝治下に行はれた文字は、學者が、メロヴインゲル文字と名づけるものであるが、既に、此の文字でも、丸い形が角形になつてゐるし、この中の約十字は、今日の獨逸文字と同じやうなのがある位である。此のフランク帝國は、ガリリアの大部分が之に屬してゐたから、やはり獨逸帝國といふべきものである。

次いで、第八世紀から第十一世紀にかけては、メロヴインゲル文字が用ゐられなくなつて、

カロリンゲル文字が行はれるやうになつた。此の文字は、カルル大帝の時代に、フランク國即ち獨逸帝國で、羅馬の混合文字(Römisch-mischschrift)に因んで作られたもので、此は、特に、伊太利で行はれたランゴバルド文字を模範にしてゐることは、卵形弓と引伸線とによつて明らかである。而して、卵形と屈折線とは、この文字の特質であつて、環形弓と直線とを基調としてゐる羅馬の文字との相違は此に存する。

此のカロリンゲルの小字は、既に、著しく、屈折文字の特徴を有つてゐて、その模型となつた羅馬の文字とは、非常に異なつて來た。勿論、立派な完成した屈折文字といふ事は出來ないが、その手法は、確かに認められる。此の傾向は、第九世紀から第十世紀を通じてあらはれてゐる。

獨逸文字は、紀元七七二年以來成立つてゐて、古獨逸帝國と同様に古いといふ事、獨逸人の精神、感情及び趣味が、此の文字を、カルルの帝國に於て案出し發達せしめた事、而して、其の字體の形成については、獨逸の鬱蒼たる森林、特に、樺の枝葉が、その模型となり、又、本來の日耳曼藝術及びルーナ文字が、其の範を示してゐる事は、斷言しても差支が無い。此の獨逸文字、即ち、寧ろ日耳曼文字といふべき文字は、カルル帝國の勢威の及ぶ所の西方諸國に、廣く用ゐられたのであるから、羅典文字主張論者が、屈折文字は、實際の獨逸文字、即ち、日耳

曼文字では無い、所謂獨逸文字であり、虚偽に獨逸と名づけられたものであるといふのは誤つた見解である。

カールの帝國では、獨逸本土に於てのみならず、フランクの北部及び東部、竝に、北伊太利に於ても、獨逸主義が、盛にその勢力を發揮したので、此等の地方では、上流社會が獨逸人であつたのみならず、一般の社會でも、獨逸の植民が勢力を有してゐたから、地名などにも、獨逸起源のものがある。西班牙や、葡萄牙の地でも、これが尠くない。ランケの世界史によれば、九四七年、巴里のユーゴー・カーペーに與へられた羅馬法皇の敎書の中には、法皇の命によつて一般民衆をしてよく了解せしめる爲に、羅典文の外に、其の獨逸譯を添へた事が見えてゐる。猶、第十世紀に於ては、歐羅巴の大多數の侯伯の宮廷で用ゐる言語は獨逸語であつたのである。

此のカロリングル文字は、七七二年より一二五〇年までの間に、次第に發達させられた。此の、完成し發達した時代は、中世高部獨逸語の詩歌の盛時、及び、ゴート式建築の盛期と同時であるのは、偶然では無い。今の獨逸文字は、此の文字の系統を引いたものであるが、十五世紀の中葉に於けるグーテンベルグの活字の發明によつて、一の定型を成すに至り、更に、その後、アルブレヒト・デュレル等の改良を経て今日見るやうな獨逸の文字となつた。

以上がライネツケ氏の説であるが、此の説では、獨逸文字は、ルーナ文字から直接の系統を引いてゐるものではない。羅馬文字を改作したのが獨逸文字であるといふ。ただ、其の改作たるや、獨逸民族の精神的發露であるといふ點で、國粹主義を主張してゐるのである。

テイロアは、無論、羅馬字の優秀なる事を力説し、獨逸文字を野蠻の字形と呼び、今日猶之を用ゐてゐる獨逸、丁抹、和蘭はまことに不幸なものであるといつてゐるが、その論據とする所は、實に、この羅馬字が世界的であるといふだけである。

此に於て、學者が、文字史の上から、獨逸文字の上に下した批判を見るに、次の三様となる。

(一) 獨逸文字は、ルーナ文字から出てゐる。ルーナ文字は、アリアンの原始的のものであり、日耳曼民族固有のものであるから、その系統に屬する獨逸文字は、獨逸民族と離るべからざる關係を有してゐる。故に、獨逸文字は、之を維持して行かなければならない。

(二) 獨逸文字は、羅馬の文字を改作したものであるが、その改作たるや、獨逸民族の精神的發露である。故に、之を捨てることは出來ない。

(三) 獨逸文字は、文明に取殘されたものであり、世界的で無い、故に、早晚羅典文字に取り替へられるべきものである。

### 第三節 讀む文字としての獨逸文字

羅典文字論者が、讀む文字としての獨逸文字を排斥する主要な點は、概して、左の諸點に歸する。

(一) 字形の上に於て、同様なのが多くて、紛れやすい。

STILLEN SICH SICH SICH SICH

IFENNER

(二) 字形に、引伸線、上下線、屈折線が多く、目まぐるしい。

(三) 大字のみで印刷した場合に、羅典文字の方は讀みよいが、獨逸文字の方は混亂しやすい。

KOTTE (OTTE)

(四) 羅典文字は、獨逸文字よりも遠い距離で見分けることが出来る。これは明らかに、讀みよい證據である。

之に對する獨逸文字論者の主張は、次の如くである。

獨逸文字は、讀む文字としては優秀なものであつて、世に之にまさるものは無い。元來、讀むといふのは、所謂讀過であつて、一瞥と推量と間接視とを意味する。眼は、語象を捉へるもので

あつて、一字一字を捉へるものには無い。此の點に於て、獨逸文字は、語象の表情が豊富であり、特徴が著明且つ透徹である。此の故に、羅典文字よりも読みやすい。羅典文字では、圓い形が集まつてゐるから、眼は、その曲線を滑つて、ぼんやりしてしまふ。而して、獨逸文字は、その特徴として、屈折ブルツベンと聚結アツフシユリツセとを有つてゐるが、此が、よく、眼をひきつける。獨逸の小文字の上下に出る延長線もまたさうである。

羅典文字では、o e c が、互に類似してゐて紛れやすい。b d p q は、單に、相互の轉換であつて、根本が同形であるから、双方、混同しやすい。r と h とは、甚だ紛れ易い。又、多くの大小の羅典文字は、同形で、單調で、人をして倦ましめる。

oo kk oo pp ss vv ww xx yy zz

又、次のやうなのは、形態が類似してゐて不都合である。

o d g o o

從來、多くの眼科醫は、獨逸文字よりも羅典文字の方がよいといふ反對意見を發表してゐるが、その意見は無意味である。蓋、其等は、一々の文字について實驗した視力試驗表によつたもので、連續した讀方についての意見では無いからである。此に關しては、キルシマン教授の實驗がある。氏の實驗によると、一字一字の場合には、羅典文字の方が、獨逸文字よりも遠い距離で見わけら

れるといふ成績になるが、全體の言葉を讀むといふ場合では、關係が變つてくる。即ち、文字で書きあらはされた言葉を讀みわけるといふ點では、獨逸文字の方が、羅典文字よりもまさつてゐる。その割合は、四に對する三の關係であるといふ事である。

#### 第四節 印刷文字としての獨逸文字

印刷文字としての獨逸文字については、獨逸文字論者は、盛に、その優秀なることを論じてゐる。一般獨逸文字協會の主張は、次の如くである。

獨逸文字は、印刷の場合に、羅典文字よりも場所をとる事が尠く、言葉が短くなり、文字の位置が密著する。此は、讀方の爲には、獨逸文字の印刷が非常に明瞭なものと相須つて、語象を速かに把住する爲に便利である。獨逸文字は、文字と文字との間が緊密であつて、羅典文字に比べると、獨逸文字で印刷した組は、字と字との距離が、比較的平均してゐる。羅典文字の組では A F L P T V W の後に、大きな空隙が出来る。C D G O Q U のやうな大きな空隙のある文字 *ah, sch, tschl, ss, tz* のやうな結合文字に於てもまたさうである。此が爲に、語象を一瞥して認めるといふ事が困難になる。植字者は、此の爲に、活字の行を、よく、規則正しく整頓する事が出来難い。獨逸の屈折文字ならば九行ですむものが、同じ活字の大きさで、羅典の圓

形文字では十行を要する。

グスタフ・クロープレヒト (Gustav Kuprecht) は、また「獨逸語の著物」(Das Kleid der Deutschen Sprache 第五版一九二二年)といふ書中に次の如く論じてゐる。

今日、我等の有してゐる獨逸の印刷文字は、ヤコブ・グムが主張したやうな墮落的產物でも無く、また、僧院文字に裝飾をつけたといふべきものでも無い。普通のゴート文字が、有機的に發展して、新しい、争ふべからざる國民的獨逸文字となつたものが、此の印刷文字である。これには、獨逸の文藝復興の影響もあるが、此の印刷文字の原型は、主として、アルブレヒト・デュレル及びその同志の努力によつたのである。此の文字は、獨逸國內に於てのみ用ゐられ、よく、獨逸語の特殊の要求に應じて、此の上も無いほどのものであるから、第十六世紀に於て、他の印刷文字たるゴート文字や、シュワープ文字 (Schwaben) を驅逐してしまつて、其の後、幾分の變遷はあつたけれども、永くその地位を保ち來つた。(摘要、中略)

算勘の上からいつても、印刷上に於て、獨逸文字の方が、羅典文字にまさつてゐる。一九一二年の獨逸印刷業者の價格表によれば、羅典文字の組の方が、獨逸文字のよりも百分の四・半だけ高價になつてゐる。それは、羅典文字は、文字の幅シュニツツが廣いから、同じ語ウオルトラウト音でも、獨逸文字の場合に比して、行數が、百分の二十ばかり多くなる。而して、同じ文字の數で、行が

多くなるから、「線下げ」(Zeilenbreiten)即ち行を次に線越すこと)の數が多くなる。價格が高くなるといふことの半分は、羅典文字の字の幅の廣いにより、半分は、羅典文字には、合字の少いによる。羅典文字と獨逸文字とを比較すると、合字は、四と十一との比である。合字の多いといふことは、文字を認め易からしめ、字幅を狭からしめる上に、大なる關係がある。羅典文字の組代の方が高いといふ事が何でも無いとしても、之に伴つて増加してくる印刷費や、紙代の高價といふことは大に考慮を要する。然し、獨逸文字には、上昇線、下降線がいろいろあるから、行間の距離が大きくなる。従つて、読みよくする爲に行間をあげると、印刷紙面の字數が、羅典文字に比べて、それは多くなる。

鉛型(Platon)で印刷する場合だと、羅典文字の鉛版の方が、獨逸文字のよりも早く使へなくなる。羅典文字の方は、おぎに讀みにくくなり、眼に害を及ぼすやうになる。レアルシユレよりも、ギムナジウムの方が、生徒に近視眼の多いといふのは、全く之によつてである。ギムナジウムでは、羅典の古文學や、佛蘭西語、英語、の教科書の、羅典文字で印刷されたものを多く讀む。然るに、その教科書の鉛版は、度々改版しないと、非常に眼を損する印刷物が出来る。而して、之を用ゐるのは、生徒の年齢からいへば、丁度、發育の最も旺盛な時期であるから、未だ固まらない生徒の視力に對して、わるい印刷物は、確かに害を與へる。(節略)

右のやうな主張は、至極尤もであるが、ただ、タイプライターの適用に關しては、折角の獨逸文字論者の主張もくづれる。タイプライターは、元來、羅典文字の上に發達したものであるから、此が、羅典文字の使用に適するのはいふまでも無いが、獨逸文字の場合に於ては、今日までの結果を見ると、如何にも不十分である。特に、獨逸語の爲に製作されたものがあるにも拘はらず、それも、何分、語間の緊密とか、合字の幅員とかいふやうな點で、獨逸文字主張論者のいふが如き、此の文字の特長を發揮する事が出来ない。加ふるに、獨逸文字用のタイプライターといふものを、別に備へなければならぬといふのが、既に、一の不便である。

タイプライターに於ける獨逸文字の不適當といふ事については、クープレヒトも之を認めてゐる。即ち、氏は、獨逸文字を羅典文字に比較して、羅典文字は、高さや廣さが、概して、一樣であつて、獨逸文字のやうに變化が無い。したがつて、讀過の際に、人の注意を惹きつける力を缺いてゐるといひ、猶、言を次いで、

然し、獨逸文字の廣さに六七種の相違があるといふことは、讀む場合には都合のよい効果を齎すが、タイプライターを用ゐるに、文字の廣さに大小の各種があるといふのは、字配りをさめるに困る。羅典文字は、字の廣さが揃つてゐるから、讀むには却つて目をぐるしい點もあるが、タイプライターの場合には都合がよい。それでも、m M Wのやうな、廣い場所を有するも

の、i のやうな、狭い場所でよいものを、同じ空間の上に印刷するから、印刷されたものを見ると、字の間のつまつたもの、あいたものが入り交つて、甚だ讀みにくい。云々。といつてゐる。

かういふ譯であるから、獨逸文字をタイプライターで印刷したものと見ると、その成績はよく無い。近頃では、例へば、*ミニ* を三字分打つといふ事をせず、聲音上の單位と形象上の單位とを一つにしてあらはすといふやうな改良を加へてゐるが、未だ十分で無い。

### 第五節 手書文字としての獨逸文字

獨逸文字論者は、手書文字としても獨逸文字は優秀であると力説してゐる。今、其の代表者として一般獨逸文字協會の主張の一節を左に掲げる。

獨逸の手書文字は、羅典文字よりも速かに書けるし、讀みよくもある。此の文字は、直角及び鈍角に方向を轉換するのを避け、而して、*h, k, m, n, p, q* 及び *r* にあつては *h, k, m, n, p, q* よりも書き方を容易ならしめる爲に飾を用ゐてゐる、羅典文字 *a, s, t, l, h, r* 等を書くには、上へ引く線、下へ引く線を書くに、筆で同じ所を二度往復しなければならぬ。六かしい場合には混雜を生じ易いし、例へば、*g* と *n* との如きは、*g* や *a* と紛れやすい。然るに、獨

逸文字は、筆が二度同じ所を往復することを避け、更に、尖つた山形の續いた場合に、小さい空間に於ける筆路の回轉反向を避ける。羅典文字の *m, n, u, i, p, s, v, w, x, h, k* は、不便であり、困難である。 *v, s, l, g* の上に引く線もまたさうである。獨逸文字では、 *ko, mo, lo,*  に筆路の回轉運動があるが、此の他の文字には無い。  及び  には、回轉があるけれども、此の兩回轉は、尖つた山形で分離されてゐる。すべて、角張つた獨逸文字は、之を、羅典文字に比べると、書くのに時間もかからず、筋の運動を要することも僅少であるし、讀むにも時間がかからず、然も、明瞭に讀める。羅典文字では、一文字中に於ても、相當の空間を存する必要があるが、獨逸文字では、出來得る限り之を避ける。獨逸の大字は、一つづきに、筆を改めずに書くことが出来る。  のやうなもので、次に來る文字に結び付けられる。然るに羅典の大字は其の中の八字までも、同一文字中でも筆を改めるやうになつてゐる。更にまた、羅典文字には、 $\equiv$ につける符號(=Haken)が無い。(= )

丸い形が連續してゐたり、  や  のやうな、判然とした字で區別されてゐない羅典文字の語象に比すれば、獨逸文字は、同じ度合の速度で書かれたのでもよく讀みわけられる。羅典字の手書や署名が讀みにくいといふ事は、新聞記者、出版業者、印刷業者、植字者、校正者の承認してゐる所である。讀めないといふ署名は、何時でも羅典文字のものである。

## 第六節 獨逸語を再現する文字としての獨逸文字

獨逸語をうつすには、獨逸文字で無ければいけない。獨逸文字は、獨逸國民性の發露であるから、獨逸語の精神をよくうつすことの出来るのは、此の文字に限るといふのは、獨逸文字主張論者の、荐りに力説する所である。その論旨を摘出すれば、略、左の如くである。

(一) 獨逸語を再現する文字として、獨逸文字の方が羅典文字よりも一層適してゐるといふのは、此の文字が、千年以來、自然に發達し來つたもので、獨逸語の特質及び必要に適應して、相伴つて來たからである。羅典文字は、一四七〇年頃に人文主義者が、久しく廢れてゐた第九世紀の古風の字形を探し出して、人工的に書齋裡で案出したものであり、これを輸入するに當つても、一々の文字を調べた丈で、徹底した見識を以て採用したので無いから、實際に於て、種々の混亂と不明瞭とを生ずる。

(二) *ä* と *i* *ii* と *tr* との區別が無いと、次のやうな場合に、區分がつかない。此の區別の如きは、學問上からいへば、單に任意のものであるにしても、眼でしつかり之を捉へるには必要なものである。

Die Straße des Kreisens

Die Straße des Kreisens

Die Straße des Kreisens

Die Straße des Kreisens

Vereinamt

Vereinamt oder Vereinamt ?

Zentrumstern

Zentrumstern oder Zentrumstern

右の如き例を見れば、思、半に過ぎるであらう。

(三) 次のやうな場合に、<sup>さ</sup>の區別が無いと、外國人などは、讀みわけのりに苦しむ。

Himmelstern      Geiststern

Tiererschen      Hirschenbuch

Reiserzeugung      Grossstadt

Massstab      Missstimmung

Gemusstreitigkeiten

(四) 獨逸語には、長い言葉が多いが、これを、羅典文字で印刷すると、非常に讀みにくい。

Waldeseen Exerzierplatz

Possesern Grossstadt

Volkscharakter Wulkenkratzer

Vorgeschriebenemassen

Ungeschicklichkeiten

Einkommensteuerveranlagungskommission

トライチュケの十九世紀獨逸史と、マカウレーの英國史とを基礎とした統計によると、一千語の獨逸語中に用ゐられた文字の数が六一一六字、一千語の英語中に用ゐられた文字の数が三九〇〇字であるから、獨逸語は、英語に比して、倍數だけ長いわけである。猶又、音節の數で見ると、マカウレーの方は、全體の語の百分の五五・七だけが一音節であるが、トライチュケの方は、一音節の語が百分の四三・三である。而して又、文字數を計算して見ると、次の如くである。

獨逸語

英語

九字乃至十二字の語

百分の二四・一

百分の六・一

(獨逸語では英語の四倍にあたり全語數の四分の一。)

十三字及び十四字の語

百分の六・五

百分の〇・五

(獨逸語では英語の十三倍。)

十五字及び十五字以上の語

百分の二・一

百分の〇・一

(獨逸語の方は二十一倍多い。)

マカウレーの用語一千語中の長い語は、十五字のものが唯一つあるだけであるのに、一千のトライチユケの用語中には、それよりも長いものが十五語もある。殊にその最も長いのは二十字のものである。

(五) 獨逸文字には  $\text{z z z z z}$  及び  $\text{z}$  ( $\text{z z z z z}$  等も亦) のやうな、二字以上のものが結び付いて、音の單位をあらはしてゐるものがあるが、羅典文字には、かういふものが無い。蓋これは、偶然では無く、羅典文字は、圓穹の部分が邪魔になつて、獨逸文字のやうに、うまくは結付かないからである。羅典文字論者は、文字に符號をつけたり、形を少し變へたりして、この缺陷を補はうとするが、これが、そもそも、羅典文字の、獨逸語をうつすに不都合なものであるといふ一端を示してゐるのである。

(六) 獨逸文字は、獨逸語をうつす爲に用ゐられて、歲月を経ること久しく、此の間に、獨逸

語によく適應するやうに發達し來つたのである。されば、獨逸語の發音は、ただ、よく、之によつてのみ表現される。殊に、外國人は、獨逸語と獨逸文字とを、離るべからざるもののやうに考へてゐるから、他の文字を以て之に代へるのは不可である。羅典文字などは、その文字には、やはり、本國の發音の聯想が結び付いてゐるから、此の文字を以て、獨逸語を書きあらはすのは、獨逸語を學ぶ者をして、徒らに混亂を感せしめるに過ぎない。

### 第七節 教育上及び衛生上より見たる獨逸文字

羅典文字論者は、獨逸の兒童は、獨逸文字と羅典文字と二様の文字を學ばなければならないから、英吉利などの兒童に比すると、負擔が重いわけである。即ち、獨逸の兒童は、

獨逸文字

印刷文字 大小二體

手書文字 大小二體

羅典文字

印刷文字 大小二體

手書文字 大小二體

の八種を學ばなければならない。然るに、英吉利などの兒童は、羅典文字四種だけを學べばよい。故に、獨逸でも、自國だけに用ゐられる獨逸文字を捨てて、世界的の羅典文字のみを用ゐるのが兒童の負擔を軽くするといふ點から見ても得策であるといふ。

獨逸文字論者は、右のやうな議論に對して、次の如く主張してゐる。

獨逸の文字を讀むことの出来る兒童にとつては、羅典文字を讀み習ふことは何でも無い。僅少の時間に於て、遊びながらにでも出来る。獨逸文字に各種の字體があるけれども、此も、容易に習得する事が出来る。兒童の手並びに形式感覺の訓練及び教育といふ上から見て、獨逸文字を書くことを學ぶのは、非常によい効果がある。羅典文字では、その結果が反對である。云々。

また、羅典文字論者は、獨逸文字は眼の爲にわるい。羅典文字を用ゐる英佛の如きは、獨逸に比して近視眼が少いといふ事を唱へるが、獨逸文字論者は、羅典文字を多く讀むギムナジュームの生徒の方が、他の種類の學校、殊に、小學校の生徒よりも近視眼にかかる率が多い。眼鏡を用ゐる人の大多數は、學者であり、教育を職としてゐるものであるが、此の仲間に屬する者は、他の國民階級よりは多く羅典文字を讀んだ者であり、又、讀む者である。小學校を出たばかりで、主として、獨逸文字を讀み且書く下等社會及び中等社會の人々には、近視眼が少い。昔は、現在

よりも、獨逸文字を讀み書きすることが多かつたが、その時代には、近視眼が、今よりは非常に少かつた。元來、近視眼増加の主要な原因は、獨逸國一般に普及した學校教育、讀書智識及び獨逸國民の多讀である。學校教育及び多讀といふ點で、獨逸人と匹敵し、而して、羅典文字をのみ讀んでゐるアングロサクソン人も、近來、近視眼の増加を嘆じてゐる云々と論じてゐる。然し、眼にわるいといふ點からの議論は、兩論者ともに、其の論據が、あまり確かで無いやうである。

## 第八節 世界文字としての獨逸文字

羅典文字論者の最も有力なる論據は、羅典文字は、世界的の文字である。此の文字は、殆んど、世界各地到る處に用ゐられてゐて、學術上にも、實用上にも、優秀な地位を占めてゐる。此の文字ならば、世界の文明諸國、いづれの國にも通ずる。然るに、獨逸文字は、一方に局してゐて、其の使用が一般的で無いといふにある。此の議論は、よほど有力である。

獨逸文字論者は、之に對して、獨逸文字は、外國でも多く讀まれ且つ了解されてゐるといつて、種々の印刷物、例へば、郵券、紙幣、はがきの如きものに見えてゐる獨逸文字の例を列舉し、獨逸の書籍の輸出額が、年々、非常の巨額であるのは、獨逸文字の世界に勢力ある證左であると論じ、猶、次のやうに主張してゐる。

獨逸文字は、外國人を助けて、獨逸語の理解を容易ならしめる。特に、英語、即ち、最も重要な外國語たる英語を語る人にとつてさうである。何となれば、多くの英語と獨逸語とは、發音は異なつてゐても、語象の同じきものがあり、又、意義も、或部分は相通じてゐるのである。例へば。

was—Was	war—war
fast—fast	sage—Sage
wage—Wage	rage—rage
hat—hat	had—had
hall—hall	fast—fast
list—list	mist—mist
kind—kind	see—see

の如きもの、即ち、これである。又、外國で出来る獨逸語教科書の獨逸語の例語及び例文は、すべて、獨逸文字で印刷されてゐる。又、外國語辭書では、獨逸語の部分には獨逸文字を用ゐるといふ事が、一般の需要に應ずる所以となつてゐる。此等の點からいつても、獨逸文字は、世界的に必要である。又、獨逸語には、非常に長い言葉が多いが、その場合に、羅典文字で書

いてあると、外國人は、發音に困難を感じる。獨逸文字ではそんな事は無い。外國語教科書で獨逸語の部分を、羅典文字で書いてあるものは、學ぶ者をして、混亂と不必要な困難とを感ぜしめる。一教科書に、次のやうな文がある。此の文を讀む者は、誤つて、獨逸語の部分をも、英語風に發音するのが普通であらう。

Custom is a second nature. I was so sage, fast that rein die (evolution) alts.

## 第九節 獨逸主義と獨逸文字

獨逸に於ては、獨逸文字主義を主張して、羅典文字を排斥しようとする一般獨逸文字協會と、獨逸語主義を固守して、外來語を驅逐してしまはうとする一般獨逸語協會と相對立してゐる。此等の協會は、いづれも、獨逸主義に本づき、言語文字によつて、獨逸の國民性を發揮し擁護するのを、その任としてゐるのである。

獨逸文字論者の主張を聞くに、次の如くである。

獨逸文字は、我等の國民性を掩護する城壁である。此の文字は、獨逸風の表現であり特徴であつて、最も有力なる感覺、即ち、眼の上に、獨逸風の強い印象を與へるものである。内地に於ては、これは、滔々奔注し來つて、國語の田野を荒廢せしめる外來語を阻止する堤防である。

外來語は、獨逸文字で書かれた文中に於て、最もよく發見せられ認識せられる。此の文字は、外國語の勢威に對して、獨逸主義の陥落及び降服を免れしめる爲の防禦的設備である。國外にあつては、甚だ容易に外人間に擴まつた獨逸風の維持者であり、保護者であり、獨逸の爲の楯であり、地球上のすべての獨逸人を結付ける紐であり、故國を遠くはなれてゐる國民の爲には、自己と故國とを連絡する橋であり、要するに、國外に於ける、意識ある獨逸主義の標幟であつて、獨逸國民に屬するすべてのものをして、「熟慮せよ。汝は獨逸人であり、而して、いつまでもさうであらねばならぬ」と、心に感せしめるのは、此の文字である。

獨逸文字は、眞正な國民的、祖國的の財産である。此は、我等の祖先が、羅馬人の文字から發達せしめたものであるが、その文字は、民族遷移時代に、我等の祖先が、基督教に改宗した際に、従前用ゐて居たルーナ文字の代りに採用したものである。然し、此の、飾の無い、冷やかな羅馬人の文字は、獨逸人の美的、技巧的の感覺や、趣味、性情に適しなかつた。彼等は、此を種々に變形し、形を裂いたり、枝を出したりして、其の趣味に適するやうに改作した。此の改作には、種々のものが參考に供せられた。ルーナ文字、獨逸の森林の樹木の小枝、古代獨逸人の製作品、後期青銅時代以來の日耳曼民族の郷土藝術の如きものまでが、其の參考となつたのである。古代の獨逸人は、決して、野蠻人では無かつた。既に、最古の時代に於て、工藝

や美術を發達せしめてゐる。例へば、木彫、鍛冶、寶玉細工の如き、これである。豊富、蓄積、複雑、多岐は日耳曼趣味である。

此等の日耳曼人は、古くより、文字を發達せしめてゐる。既に、第五六世紀のフランクのメロヴィンゲル王朝時代には、所謂メロヴィンゲル文字があつたが、此の外にも、西班牙に於ける西ゴート文字、伊太利に於けるランゴバルド文字、及びアングロサクセン文字などが發達した。

カルル大帝の治世に、フランクの教育の指導者であり、大帝の信任を受けてゐた學者アプテス・アルクイン等の力によつて、後世の所謂カロリンドン小字が發達したが、此の文字が、從來の文字を驅逐し、現在の我が獨逸文字の祖先となつたものである。

此の時代に於て、此等の文字は、カルルの世界的帝國に於て、即ち、大體に於ては、尠くとも、血統上猶優秀な日耳曼西部の上流社會に擴まつたが、羅馬文字は、唯孤立して用ゐられるに過ぎなかつた。後に至つては、日耳曼民族の貴族階級と、ローマンス民族の平民階級との融化調和が出来たが、それは、後世の事である。

今日、普通に、獨逸文字といふ名でよばれる屈折體の文字のあらはれたのは、紀元後七二二年から八〇〇年までの間である。されば、此の文字は、獨逸帝國と年齢を等しくし、我が千年

以來の王位及び帝國史と等しく尊い。此の文字が、完全なる屈折體の特徴を備へるやうになつたのは、漸次の發達を経てであつて、千二百五十年頃の事である。然し、吾人の古代高部獨逸文字主義は、中世高部獨逸文字主義を通じて、此の屈折文字の中に存して居る。吾人の文字の、最も完全に形成されたのは、中世高部獨逸の詩及びゴート建築様式の生誕と時を同じくして、第十三世紀の前半、獨逸主義の勃興時代である。ゴート様式も、また、眞に日耳曼的のものであつて、此の中にも、亦、豊富、多岐、蓄積に對する獨逸の美的判斷があらはれてゐる。而して、此の文字は、十三世紀以來、ゴート文字ともよばれてゐるが、これからして、獨逸の手書文字、書籍文字、印刷文字が、純粹の獨逸日耳曼的發明として發達した。此が、グーテンベルグの印刷術の發明、及び、デュール等の美的形成によつて、更に、一層確乎たる是認と生存の權利とを得たのである。

グーテンベルグの印刷術發明後約二十年、伊太利に興つた文藝復興運動、人文主義の運動は、第七世紀から第九世紀に至るまでのもので、既に久しく滅びてしまつてゐた字形、獨逸文字即ち屈折文字の形成された以前の字形、新羅馬文字ノイローマ文字（羅典文字、ローマンス文字）を擴めることに努めた。ローマンス民族は、喜んで此の文字を採用し、また、アングロサクソンのやうな、既に、一部分はローマンスに變成した民族も、漸次之を採用したが、此の文字を獨逸に入れよ

うとした獨逸の人文主義者の運動は失敗した。獨逸人は、獨逸語には屈折文字を用ゐるべき事を知り、又、無意識ながらも、此が、吾人内部の本質に適してゐることを感じたのである。かくて、屈折文字は、獨逸國に於ても、北部日耳曼人の間に於ても勝利を得た。

獨逸文字は、實際の國民文字である。此の文字は、カロリング朝に成立ち、ホーヘンシタウフエン朝に立派に形成され、ホーヘンツォーレルン朝に、新帝國に於て、盛に廣く發達し、榮えるに至つた。ホーヘンツォーレルン家の主權者は、五世紀の間、常に、忠實に之を維持し來つた。吾人國民の三星といふべきルーテル、ゲーテ、ビスマルクは、言葉に於ても、實行に於ても、此の文字に對する執著を示した。而して、いづれの時代に於ても、一流の思想家の大多數は、此の文字の、熱心な味方であつたし、また、味方である。

(以上節略)

「獨逸語の著作」の第二編第五章に於て、クープレヒトは、次のやうに論じてゐる。

獨逸には、羅典文字は、唯二度、一度は、十六世紀に於ける文藝復興期に於て、一度は、十八世紀の啓蒙時代に於て輸入せられた。然し、この二度共に、その用ゐられたのは唯少しばかりの間だけで、羅典文字は間も無くその勢力を失つたのであるが、今日に於ては、羅典文字が、猶、國際的交通の爲といふ好辭柄に助けられ、又、タイプライターに適してゐるといふやうな

點で、専門の文書などには、時々用ゐられてゐる。

何故に、獨逸人が、人文主義者の運動に参加するを欲せず、羅典文字を採用せずして、統一的の發達を経て來た獨逸文字を固守し、羅典文字をして、ローマンス民族及び英吉利人の間にのみ専ら行はれるに至らしめたかといふに、此は、吾人の國民性から出で、吾人の、昔から有してゐる、確乎たる永久の様式スタイルゲマニール感に出でたのであり、ゲーテも、獨逸文字を讚美して、「獨逸情操の發現」といつてゐる。又、獨逸語の特殊の必要より生じたものである。他の國民は、其の國語の構成に、あまり特色が無いから、人文主義の文字を、何の故障も無く採用することが出來た。英吉利や、佛蘭西のやうな西方國民は、各、その國語の爲に適當な文字を選び出したわけであるが、獨逸國民が、獨逸文字を選び出して、自己の文字としたのもまた同様の理由によるのである。此の文字は、發達の時期に於ては、多數の字形が存在してゐたのであるが、その中から、自然淘汰の結果、現在の字形が残つたものであるし、今日の確立した字型は、此の上も無く、我等の國語に適合してゐる。而して、我等の國語は、その文章の構成が豊富且つ困難であるが爲に、語詞及び文の構成を、力を勞する事最も少くして、最も迅速に捕捉することが出来る文字を用ゐるといふ必要が益、感せられるのである。

獨逸の國民精神が、四世紀を経て、猶、羅典文字を受け容れずに、外國文字として之を感

するのみに過ぎないといふのは、單に、羅典文字が、獨逸の文章に適しないといふ事ばかりで無く、その美的表現の形式が、複雑といふ點に於て不足があるからである。獨逸人は、文字の潑瀾たるを多くよろこぶ。彼等は、ゴートの様式の感じを嫌惡したが、さうかといつて、伊太利の人文主義者のやうに、一朝にして、ゴート文字を廢棄するといふやうな事はしない。然も、讀む事の助けにならないやうなすべての飾を除いて、健全に、微妙の感をいだかしめるやうに、之を發達させた。彼等は、其の文字の上昇線、下降線の長さの割合をととのへ、區別の立つやうにして、進んでゆく讀書の要求に適ふやうに、之を改善した。而して、長い語詞を、容易に迅速に讀めるやうにうつし、同時に固有の純粹の獨逸風の美的價值を有する、理想的の、新しい、獨逸の書籍文字を造り出した。獨逸の書籍印刷術の最初の六十年間は、印刷術史上の最も光輝ある時代であるが、此の時代に於て、表現の形式の豊富な、一の新しい文字、即ち、狹義に於けるフラクツール(屈折)文字が出來たのである。

羅典文字は、此の如き發達の力を有してゐない。その字形といふのは、本來は、鑿で刻む刻文や、羽毛または刷毛を用ゐて羊皮紙に書く、僧侶の手書の爲につくられたものであつて、獨逸の屈折文字のやうに、印刷の爲に作られたものでは無い。羅典文字が、不朽の美的價值を有してゐるといふのは事實である。然し、一の美しい様式の爲に、他の、もつと多く活々とした

---

ものを滅してしまはうといふ事は、藝術的良心を有するものの誰も嫌ふ所である。

(以上節略)

빈

면

### 第三章 露西亞に於ける國字問題

現時、露西亞に行はれてゐる文字には、國民文字若しくは俗用文字といふべきものと、寺院文字といふべきものとの二種がある。前者は、科學、文學、その他社會一般の文書に用ゐられるものであり、後者は、特に、聖典、經文、讚美歌等の書類を印刷するに用ゐられるものであつて、普通に露西亞文字といふ時は、前者ばかりを意味してゐて、後者はその中に含まれてゐない。

此の、普通に露西亞文字といはれるものは、第十八世紀の初頭、彼得大帝の國字改善の意見に本づいて制定せられ、その後若干の修正を経て完成されたものであつて、世界の文字史上に於て、國字の改善といふことが、徹底的の成果を得た一の事例として見ることの出来るものである。

現行の文字の制定された以前の露西亞文字は、キリル文字といはれるものであるが、このキリル文字といふものは、第十世紀第十一世紀の頃、隣邦ブルガリアから、その文學と共に、露國に輸入されたものである。元來、キリル文字といふ名稱は、スラヴ文獻の祖といはれるコンスタンチン及びメンヂの兄弟のうち、コンスタンチンの僧名キリルから出たものである。此の兄弟は、第九世紀に、基督教を西部スラヴ民族の地に傳へた人で、その宣傳の必要上、始めて一の文字組織を制定し、その文字を用ゐて聖典その他のものをスラヴ語に翻譯したといはれる。最も、これ

は當時既にスラヴ民族の間に、その國語を寫す爲に用ゐられてゐた文字があつたのを、この兩人が取捨増減して整理したものであらうともいはれる。兎に角、此のキリル文字は、當時に於けるブルガリアの文語として隆盛の域にあつた古代寺院スラヴ語この語は歐洲大陸の東部及び東南部に擴がつておたスラヴ民族の間に發達した文語でその原住地については諸説あるがまづ古代アルカリヤのマケドンの方言で今日のサロニカ附近にあつた古代スラヴ民族の語を寫すに用ゐられてゐたもので、露西亞では、この古代寺院スラヴ語を輸入すると共に、その文字をも輸入したのである。今日の寺院文字は、このキリル文字から直接の系統を引いてゐる。

キリル文字は、元來希臘文字と酷似したもので、希臘文字の増補され變化されたものと考へられる。これが露西亞に入つてから、今日の俗用文字の發達するに至るまでには、約三段の著しい變遷が見られる。その第一期は楷書體の時期であるが、漸次半楷書體のものが併用されるやうになり、第十五世紀第十六世紀の頃には、この半楷書體のもののみが専ら用ゐられるやうになつた。これが第二期である。第三期は第十五世紀の末頃からであつて、此の時期には、連記體のものが専ら行はれるやうになつた。然るにこの變遷は、進歩を來したといはむよりは寧ろ錯雜難解の度を加へたといふべきものであつて、その文字には、無用の廉が多く、書讀に不便の點が尠くなかつた。此に於て、彼得大帝の慧眼は、夙くも、國字改善の事業が、國民の福利を増進するに緊要なものであることを察し、大帝は直にこの事業に著手したのである。

彼得大帝が、屢々西歐に遊んで、諸外を圖つたことは、世人の知る通りである。自國の文字の缺陷を覺るに至り、之が改とである。猶、この點に於て、大帝に直ぐ及び波蘭人イリア・コピエヰツチの兩、このアムステルダムで出版された諸般の他のスラヴ諸國で用ゐられたスラヴ文字於て、キリル文字よりは寧ろ羅典文字にここに發してゐるといつてよい。

彼得大帝は、このアムステルダム出版の時目や人名は不明であるが、大帝は版の露書に採用された文字を基礎としてよつて、新露西亞文字の活字を鑄造す。ン・デメイ植字工インドリヒ・シルバヒ

新國字を  
用ゐて印  
刷した最  
初の書

彼得大帝  
の文字選  
擇表

ムステルダムから露國へ來た。同年また、露國の活字工ミハイル・エフレエーフが、和蘭から輸入された新活字を雛形として、新露國文字を鑄造し、活版印刷の附屬器械を製出し、此の自己の製造した活字に新字鑄造の手續書を添へて大帝に上つた。露國の俗用文字は、此の時に於て始めて成立つたといふべきである。次で、一千七百八年三月、ミハイル・エフレエーフは、自己の鑄造した新國字を用ゐて、測量幾何學を出版した。これが、露西亞の現代文字所謂俗用文字で印刷された第一の書である。

ミハイル・エフレエーフの新文字の良好なことは、一般に認識せられたが、一千七百九年には、新文字の植字工等は、彼得大帝に上書して、新文字が舊來のストラヅ文字に勝る所以を述べ、新文字の植字に對する費額を増大せんことを請ひ、更に自己の意見を確實ならしめんが爲に新文字の字形に對して、舊來のストラヅ文字の印刷字形及び手書字形(楷草書體)を對照して記載した。大帝は、此の對照表を得て、自ら筆を執つて、その中のストラヅ字形を悉く抹消し、俗用文字の字形のみを殘し、猶その中でも三字を抹消した。これが、所謂彼得の文字選擇表として有名なものである。この選擇表の餘白には、大帝の手書があつて「此の活字を以て、歴史及び工業書類を印刷すべし。抹消せる字體は、上述の書類に於ては用ゐるべからず」と見え、その終に、一千七百年一月二十九日といふ日附がある。

然し、文字の組織は、當時未だ確定するに至らず、暫らくは混亂の状態にあつたが、一千七百三十五年に至つて、學士院の協議の結果として二三の修正が加へられ、次で一千七百五十八年、更に學士院の會議によつて二三の修正が加へられたが、學士院はその決議を發表し、全國の印刷業者をしてこの制定に従はしむる事とした。ここに於て露西亞現行の文字組織は、その最後の決定を得、以て今日に及んでゐる。

然しながら、現行の露西亞文字にも種々の缺點が無いではない。これについても、學者間に種々の議論があるが、露西亞の第一流の言語學者ヤコフ・グロートの如きは、次の三箇條の缺點を數へてゐる。

第一 同一音に二個以上の無用の文字のあること

第二 現在の國語に存する音の或ものをあらはず文字の無いこと

第三 二音の複合したものをあらはずに一文字を用ゐてゐること

而して、また、露西亞では、現行露西亞文字の字形の複雑なものと、歐羅巴の他の諸國と異なつた字體を用ゐてゐるのが不便であると願ひて、羅典文字を用ゐようといふ考をもつてゐる者もある。現に、最近の革命當時、羅典文字使用論も出たやうであるが、その後の消息に至つては詳かだ無い。

빈 면

## 第四章 アルバニアに於ける國字問題

アルバニアに於ける國字問題は、他の諸國に於けるのとは大に趣を異にし、政治上の複雑した關係が之に伴つてゐる。元來、アルバニア人は、普通に羅典文字を使用してゐたのであるが、一千九百八年土耳其新政府の起るに及び、土耳其領全體に劃一主義の新政を行はんことを企て、從來放任主義を採つてゐたアルバニアに對しても、徴兵令を施行し課税を強制したのみならず、それまで用ゐて居た羅典文字を廢して、アラビヤ文字即ち土耳其文字を用ゐさせようとした。然るにアルバニア人は、之を憚ばず、國民性に迫害を加へられるものとして、一千九百十年の春には、北部アルバニアに一大騷亂を惹起するに至つた。これは、同年の秋に至つて、土耳其とアルバニアとの間に、七箇條の公約が結ばれ、漸く鎮靜に歸したのであるが、その公約中には、學校を建設するといふことが見えてゐる。ここに學校といふのは、アルバニア語の學校といふことを意味してゐる。元來、アルバニア地方の教育は、すべてその實權が宗教家の掌握する所となつてゐて、その言語もいろいろであつたのであるが、土耳其政府は、教育の實權を宗教家の手から奪つて、すべて之を政府に收め、土耳其語によつて統一しようと計畫したので、これがやはりアルバニア人の反抗を招き、公約中にアルバニア語の學校を建設するといふ意味のものが加へられるに至つ

フラウシ  
ユライエ  
兄弟の  
アルバニ  
ア文字

アルバニ  
ア文字使  
用の公約

たのである。而して又、アルバニア人は、前に述べた如く、羅典文字を用ゐ來つたのであるが、今より三十餘年前、フラウシユライエルといふアルバニア人の兄弟が、羅典文字を幾分損益して、アルバニア語を寫すに便利なやうに工夫したので、アルバニア人は、一般に之を利用し、大に便利を感じてゐた。土耳其政府は、之を禁止したけれども、北米ボストン或は伊太利のシシリ島にあるアルバニア人は、上述の改良文字によつてアルバニア文學を書き綴り、ひそかにアルバニア地方に輸入したので、同地方の人民は、喜んで之を愛讀するといふやうな有様であつた。それで一千九百十一年、アルバニア人が再び叛亂を起し、土耳其政府が討伐に苦しみ、終にアルバニア人の要求を容れて局を結ばうとした際の、アルバニア人の要求十二箇條中には、アルバニア文字使用の自由を得ることといふ項目が見えてゐる。然し、土耳其政府は、この公約を履行せず、ボストンやシシリ島から輸入するアルバニア文學を讀むことをすら禁じた。

アルバニアが、土耳其政府の羈絆を脱しようとしたことは、久しい以前からのことであるが、未だ完全にその目的を達しないうちに、バルカン戦争が起つて、アルバニアは、歐洲列強から、その自主獨立を認定されるに至つたが、その後、歐洲大戰の渦中にあつて、戦後、アルバニアがどうなるか、その文物制度がどうなるか、従つて、國字問題が如何なる風に發展してゆくかは、豫知すべからざる問題である。

大戦前までのアルバニアの通用文字といふべきものは、アラビア文字即ち土耳其文字であるが、これは、その治者たり、征服者たる土耳其政府から強制された結果である。然し、一方に於ては土耳其政府から禁止されてゐるにも拘はらず、希臘文字及び羅典文字を使用してゐるものが多い。されば、アルバニアで使用されてゐる文字は、つまり三種あるわけである。それに、前に述べたフラウシユライエルの文字を加へると四種になる。アルバニア人が、文字の組織を整理して、或一定のものを得ようといふ希望を有するのは、敢て今日にはじまつた事で無い。殊に外國在住のアルバニア人は痛切にその必要を感じ、アルバニア語に適應するやうに、アルバニア文字か、羅典文字かを修正しようとして盡力してゐるが、羅典文字説の方が、どうも有力であるらしい。然るに、サロニカ港在住のアルバニア人は、これに反對してゐる。それは、彼等が、その在住地方の關係から希臘文字を用ゐてゐるし、希臘人とアルバニア人との人種的關係が錯綜してゐて、兩者が極めて親密であり、學校に於てはすべて希臘文字を使用してゐるからである。これ等の地方のアルバニア人が羅典文字を好まないのは當然である。南部伊太利及びシシリー島には、約二十萬のアルバニア人が在住してゐるが、彼等が一般に羅典文字を使用してゐることも、その在住地との關係上、固より怪しむに足りない。

---

外國に於ける國字問題  
終

大正八年七月二十一日印刷

大正八年七月二十三日發行

# 文 部 省

東京市麴町區隼町四番地

刷者 小林 又 七

電話九段四一九番

電話九段八五〇番

東京市麴町區永田町陸軍省構内

刷所 小林又七印刷所

電話新橋九四一番



# 外國に於ける國字問題

5  
00  
了20